

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

靈峰『山門山』

作成レギュレーション

基本概要

- ・経験点：215000 点
- ・資金：360000G
- ・名誉点：2000 点
- ・成長回数：342 回
- ・マジックトームストーン：戦記 2500 以上、詩学 1800 個
- ・アイテムレベル制限：武器ランク S 以上／防具ランク S 以上
- ・レベル制限：13～14

制限事項

- ・放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・武器防具強化に関する特殊制限
- ・シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

導入

君達は、テイルフェザーで休んでいた。

その上で、妙なことを言っていたギャロンに声をかけることになる。

(※GM ×モ：RP 待機)

ギャロン

「気になることってのは他でもない、『グナース族』のことだ。

二本足で歩く、アリだか力ニだかって恰好の蛮族で、西の岩場に棲んでるんだがな…。これまで、ドラゴン族を恐れて、獵以外では決して縄張りを離れなかつたんだ。ところが最近、急に活発になりやがった」

(※GM ×モ : RP 待機)

ギャロン

「そればかりか、無謀にもドラゴン族の|壙《ねぐら》にまで、ちょっかいを出しているようじゃないか。偶然に出会ったウチの若いモンが、グナース族に槍だか銃だかで、追い回されてもいる。森を出て西へ向かうつもりなら、用心するこったな」

そのように、君達にギャロンは警告するだろう。

続けて君達は、セルマに話を持ちかける必要がある。

(※GM ×モ : RP 待機)

セルマ

「グナース族…ねえ…。どうやら、私が暮らしていた頃とは、ウィルムフロアの状況も変わってきてているらしい…」

エクセリア

「セルマ…、こんな魔境に暮らしていたのか？」

(※GM ×モ : RP 待機)

セルマ

「第七靈災の直後に、家族を失った私が寒さに追われ、ウィルムフロアに逃れたことは話したな。あの時、私は道に迷い、森を抜け出てしまったのだ。偶然、狩りのために山から下りてきていた、聖竜『フレースヴェルグ』に出会ったのも、その時さ。

彼との邂逅と過去視で、私は気を失ってしまった…。そんな私を助けて介抱してくれたのが、ギャロンなのだ。以後、私は数年間を、この集落で過ごしたのさ」

(※GM ×モ : RP 待機)

という小話も挟みつつ、君達はウィルムフロアの古遺跡へと向かうだろう。

道中で、君達はグナース族がけしかけた魔動機に襲われる。

敵：グナース・パルヴァライザー×3

エクセリア

「…おい、グナース族はこんな魔動機まで使ってたのか？」

セルマ

「いや、そんなことはなかったはずだ…。一体どうして…？」

更に進むと、やはりグナース族が魔動機をけしかけてくる。今度は先ほどよりも大型のものまで。

敵：グナース・ドゥーム×1、グナース・パルヴァライザー×3

君達は、それとも退けた。

その先に、斜めに転けた建造物があった。

ヴォルフラム

「…これが、竜詩の…？」

(※GM ×モ：RP待機)

ヴォルフラム

「詳しく鑑定してみないことには分からんが、冰女、これはどの時代のものだと心得ている？」

セルマ

「…この遺跡は、今より数千年も昔…、竜と我らの祖先とが、友として暮らしていた時代のものだ」

(※GM ×モ：RP待機)

ヴォルフラム

「お前はそう捉えているのか。

俺は、これは貴様たち異端者が作った建造物だと教えられた。

…こんな瓦礫を有り難がる気が知れんのも事実だが…、それ以上に…今はこれを語っている余裕はないんだろう？」

セルマ

「それもそうだな…」

そう話しているのを、エクセリアは…

エクセリア

「…………？」

困惑した…というか、アホの子ですと言わんばかりの表情で、君達とセルマたちを交互に見ていた。

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリア

「…何が何だか、さっぱりだ…」

君達は、この遺跡を辿って進むことになる。

(※GM × モ : RP 待機)

そして歩いて、『不浄の三塔』に辿り着いた。

(※GM × モ : RP 待機)

「先に手出しじゃしない」と言うヴォルフラムに免じて、セルマが交渉役を買って出る。

セルマ

「ヴィゾーヴニル…！」

そうセルマが呼ぶと、白い竜が降りてくる。

(※GM × モ : RP 待機)

ヴィゾーヴニル

「おうや、そこなる小さき者は、セルマではないか…。グナースどもの尖兵かと思うて、危うく焼き殺すところであったぞ？」

セルマ

「ああ、ヴィゾーヴニル、会いたかったわ。竜と人との融和のため、力を貸してほしいのです」

ヴィゾーヴニル

「何やら訳ありの様子…。吾輩にも、ようくわかるように話すがよい」

(※GM ×モ : RP 待機)

ツッコミ無用。ヴィゾーヴニルはそういうやつだ。

ヴィゾーヴニル

「…ふうむ、フェルニゲシュとその眷族を諫めるため、我が父祖たるフレースヴェルグの助力を乞いたいと？父祖以上の適任がいるとおもうのだが」

セルマ

「ええ、その通りです」

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴィゾーヴニル

「ならばなぜ、此奴が『フェルニゲシュの竜の眼』を持っている？」

ヴォルフラム

「これは、フェルニゲシュの敵視を俺に向けるという故あってのこと。…必要とあらば、お前の『眼』も…」

エクセリア

「待て。…ヴィゾーヴニルだったな。今の今まで理解力が及ばなかったが…、なるほど、これは中々面白いことになっているようだ」

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴィゾーヴニル

「…ほう。お主、琥珀の召喚獣か」

エクセリア

「そんなところだ」

エクセリアが、右手に炎と光を数秒纏わせ、ヴィゾーヴニルはそれを受けた。

ヴィゾーヴニル

「まあ、それはよしておくとしよう。今ここで、眼を持つ此奴を喰らうのは造作もないが…、我が父祖の望みは静寂。…我らは、憎しみあういはずれにも与しない」

(※GM ×モ : RP待機)

セルマ

「融和と助力を求める意志は、私達自身の言葉で、偉大なる竜に伝えましょう。どうか、靈峰『山門山』に至る道を拓き、私達に希望を！」

(※GM ×モ : RP待機)

ヴィゾーヴニルは、少し悩んだような目つきになりながらも、答えを返す。

——靈峰への道を拓いてやってもよいが、グナース共が呼び降ろした神をどうにかしながらきやならんので、先にそっちをなんとかしてもらえないか、と。

エクセリア

「…そいつを片付ければ、いいんだな？この言質、重く受け取らせてもらうぞ、ヴィゾーヴニル」

(※GM ×モ : RP待機)

ヴィゾーヴニル

「ほほう、小さき者共が…？いくら琥珀の召喚獣の力を以てしても、同胞たる猛々しい竜でさえも、幾度も翼を折られ、地に落ちているという事実からは逃れられまい…」

そう言って、ヴィゾーヴニルは一度目を閉じる。

数秒後、何かを見通したのか、彼女は目を開き言う。

ヴィゾーヴニル

「ふむ。そこまで力を増していると言うのなら、成し遂げてみるがよい…。吾輩はそれを見届けようぞ。お前達の意志が、どれほど強いものなのかを！」

そう言って、ヴィゾーヴニルは飛び去る。

——エクセリアの眼が、青く光った。

(※GM × モ : RP 待機)

武神強襲

君達は、未だ青く光るエクセリアの目を見て不審に思うだろう。

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリア

「…不審だって？悪いね…この地域の中から、蛮神の存在を探していただけだよ。

幸いにも、目星はついている。あとは、ドラゴン族の存在定義を一旦除外して…」

そんなときだった。

？？？？（ドラゴン語）

『全く、我に用があるならさっさと言えばよかったものを』

セルマ

「なんだ…！？」

セルマが上空を見上げる。

エクセリア

「…わざわざ降りてきたのか…、ニーズヘッグ」

ニーズヘッグ（ドラゴン語）

『我が妹、ラタトスクが噂を我に言ってきたものでな』

どういう耳だよ！！というのは…お世辞だろう。

セルマ

「万事解決？」

エクセリア

「今からヴィゾーヴニルの『お願い』を解決しに行くところだ。それと、どちらにせよフレースヴェルグには意見を通しておきたい」

(※GM ×モ : RP待機)

ニーズヘッグ

「…んん”…。やはり人語の方が分かるか、琥珀の。既に、フェルニケシュには釘を刺してはあるのだが…奴の復讐心は留まることを知らぬらしい」

(※GM ×モ : RP待機)

そう言って、ニーズヘッグは少し目をつぶる。

そして見開いたかと思えば、君達のうちのひとりに、赤い玉っころを渡す。

ニーズヘッグ

「『竜の眼』と同じ効能を持つお守りだ。念のため持っておけ」

そう言って、ニーズヘッグは飛び去っていくだろう。

風圧でヴォルフラムが吹き飛びそうになったのは別の話だ。

エクセリア

「…グナース族が降ろした神の位置は特定した。だが、戦うにしても、手がかりというものがなければ対応ができない。彼らが降ろした神が、一体どんなものなのか、彼らの信仰について探らなければ…」

セルマ

「…分かった。グナース族に関してはギャロンが詳しい。一度、『テイルフェザー』に戻り、彼に話を聞こう」

(※GM ×モ : RP待機)

君達は、獵師の集落、テイルフェザーに戻った。そこにいる、ギャロンに声をかけ、話を聞くことになる。

(※GM ×モ : RP 待機)

ギャロン

「グナース族の信仰が知りたいだあ？…は？グナース族が蛮神を召喚した？遂に、この地にまで蛮神が…。連中の詳しい文化については、殆どお手上げ状態でな…。だが、北西に棲む、はみ出し者のグナース族となら、時折、ぶつぶつ交換をする程度には交流がある。

手土産でも用意すれば、何か情報を聞けるかもしれんぞ」

(※GM ×モ : RP 待機)

君達は、テイルフェザー北西の部落に向かうことになる。

このとき、『閨門樹の実』はヴォルフラムが、『人喰い妖花の蜜』はセルマとエクセリアが、『幼体ギガントボアの肉』は君達が集めてくるという分担となった。

敵：リバー・ギガントボア×3

君達はギガントボアを狩り、ギャロンにより地図に記された取引場所に集めたものを置いた。

会話の選択肢

・ヴォルフラム

「蒼の竜騎士が、ジャンプで果実採りとは…。…いったい俺は、こんなところで何をやっているんだ（震え声）」

・エクセリア

「久々にライジングフレイムなんて使ったぞ…。普段はプロシリタイズで掃討をやっていたんだが、『それでは蜜さえも焼けてしまうのでは』なんて言われてな…。比較でね…」

(※GM ×モ : RP 待機)

そうして待機していると、グナース族が現れる。

イダテン

「シシシシシ…。誰かと思えば、ヒトの狩人たちではないか。そんでもって、この芳しい香りは…」

興奮するグナース族

「妖花の蜜ッ…！」

高揚するグナース族

「閨門樹の実ッ…！」

イダテン

「そんでもって…幼体ギガントボアの肉ッ！！

シシシシシ…どれもこれも、我らの好物ばかり。いやはや、苦しい生活が助かるというのだ。

シシシシシ…ヒトの狩人たちよ…取引がしたいのなら、我らが棲処に来るがいい。狭苦しい場所ではあるが、竜避けの香も焚いてあるぞ」

色々ツッコミどころのある彼らに案内されることになる…。

(※GM × モ : RP 待機)

PCへの選択肢

- ・様子のおかしい人です
- ・…大丈夫かなアレ

(※GM × モ : RP 待機)

ヴァスの塚

君達は、案内された小さな部落に辿り着いた。

(※GM × モ : RP 待機)

イダテン

「シシシシシ…。話は、長に通してある。取引したいなら、話してみるがいい。

我らは、話さにやならん『分かたれし者たち』だからな…」

エクセリア

「…『分かたれし者たち』、か…」

イダテンが指し示した、髭の生えたグナース族の長に、君達は話しかけることになる。

(※GM ×モ : RP 待機)

ストーリーテラー

「シシシシシ…取引に来たと話は聞いた、ヒトの狩人たちよ。随分と気前のいい手土産と聞き、喜んでいるぞ。…して、ヒトの狩人は何を求める？」

エクセリア

「確かに私達は、あなた方と取引に来た。ただし、求めているのは情報…。話を聞きに来ただ。グナース族が呼び降ろした『神』について知るために」

(※GM ×モ : RP 待機)

ストーリーテラー

「シシシシシ…。物を欲さぬとは、奇妙な狩人だ！だが、話をするのは好きだぞ…。何と言っても、我々は『分かたれし者たち』だ！」

シシシシシ…よからう、『神』について教えよう。『繫がれし者たち』が呼び降ろした『神』についてな！」

そう言って、彼は解説を始める。

——ある時、『グナースの塚』に、東の空から一匹の傷ついた竜が落ちてきた。

恐れ怒った『繫がれし者たち』は、地に伏した竜を囲み、槍で刺し、火砲を放ち、魔術で倒したという。

竜は恐ろしい存在。その影に怯えて生きてきた『繫がりし者たち』は知った。戦いに疲れた竜であれば、易々と殺せるのだと。

そこで、『繫がりし者たち』と『繫ぎ止めし者』は決意した。今こそ『黒き者』の助言を受け入れ、『神』を呼び、その刃を借りて戦うことを。

すべては、より多き子を育むための領地を得るため。グナース族を、更なる繁栄に導くため。

ストーリーテラー

「…しかし、だ。

シシシシ…それで、大切なクリスタルを、雨あられと神に捧げてしまうのは、勘弁ならん！何といっても、我々『分かたれし者』は、神嫌いなのだ！」

ストーリーテラーはそう言って、己の立ち位置も明確にする。
それを聞き、セルマは思い詰めたような表情をする。

(※GM ×モ : RP待機)

セルマ

「…私は、蛮神の力に頼った身だ…。神降ろしが、星の命を蝕むと知った上でな…。
必要悪であったと信じているし、罪を背負う覚悟もある。だが、グナース族は、領地を広げんと神を降ろしたという。彼らから罪を背負う覚悟が感じられないのは、私が傲慢だからだろうか…」

エクセリア

「…さあな。憑依型蛮神を降ろすのと、ドミナントとして顕現することで、なにも違いはありませんやしないだろう。精々、リソースが自身か他人かの違いだ。

彼らは、無邪気に神を呼んで領地を広げようとしている。やはり、彼らの蛮神を倒すしかない…」

(※GM ×モ : RP待機)

ヴォルフラム

「言うは易しだな、エクセリア。お前がグナース族の蛮神と戦うというのなら別だが、蛮神討伐となれば、『光の戦士』に頼るほかあるまい？」

エクセリア

「…眞実はお前の眼で確かめろ。そうやって振るのであれば、容赦なく顕現して撃退に向かうが？…それでは、『光の戦士』が文句を垂れるだろう」

ヴォルフラム

「こいつ…！」

(※GM ×モ : RP待機)

エクセリア

「まあそういうわけだ。頼めるか？」

PCへの選択肢

・いやだ断る

・.....

セルマ

「いや、私がやろう…。私とて『超える力』の持ち主なのだ。光の戦士よ、手を貸してくれるか？」

ヴォルフラム

「流石は『氷の巫女』殿。ドラゴン族を助けるためなら、危険も顧みないか…。だが、どうやって蛮神を、戦いの場に引きずり出すつもりだ？」

(※GM ×モ：RP待機)

エクセリア

「…私が顕現して一掃すれば、全てカタがつくんだがな…。まあいい。

グナース族の蛮神に近づくための方法を、こここの住人に聞くのが最善手じゃないか？参謀役は苦手だが、これでも一国の為政者を担っているんだ、成し遂げてみせるさ」

そう言って、エクセリアはこの塚の探索を開始する。

その後ろ姿を、ヴォルフラムは見ていた。

ヴォルフラム

「あれが、古き時代の残滓か…」

聞き込み判定（冒険者+知力B） 目標値：31

成功時、以下の情報を入手する

- ・『分かたれし者たち』は、『繋がりし者たち』と違って、『繋がりし者たち』の意志は聞こえず考えも分からない。
- ・『神』に会えば、魂を取られてしまう。
- ・『神』に会いたいならば、神の贊にされるのが手っ取り早い。

そんなときに、グナース族の一体、ウィーターが声をかけてくる。

ウィーター

「シシシシシ…お前達が、とびきり氣前のいい狩人か。だが、俺はまだ分け前をもらってはいないぞ？ひとつ…ひとつでいい…。

『星降りの肉』で手を打つぞ、狩人よ。『スターダスト』を倒して、取ってくるがいい。そしたら、話を聞かせてやろう…話をな」

君達は、唐突にふっかけられた難題に困惑するだろう。

(※GM ×モ：RP待機)

エクセリア

「…そっちはどうだった？」

(※GM ×モ：RP待機)

エクセリア

「星降りの肉、ねえ…。となると、スターダスト・ヴルムを倒すのが良案だろう。間違っても、それ以外は倒すなよ？文字通りくたばる羽目になる」

君達は現在の時刻を、『空を見て』確かめる必要がある。

現在の時刻は（2d）

2~4：未明・朝

5~9：昼

10~12：夜・深夜

(※GM ×モ：スターダスト・ヴルムは夜・深夜にのみ出現する)

君達は、塚の付近を流れる川にテントを張り、スターダスト・ヴルムが現れるのを待つことになるだろう。

2dを振り、出目が「3」以下だった場合、『ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン（≒Sモブ）』が出現する。

敵（時刻があっている場合）：スターダスト・ヴルム

君達は、スターダスト・ヴルムを倒し、肉を剥ぎ取った。
ウィーターに話しかけよう。

ウィーター

「シシシシシ…。求めているのは『星降りの肉』。
用意できているのか、気前のいい狩人よ」

(※GM ×モ : RP 待機)

ウィーター

「シシシシシ…本当に気前のいい狩人だな！よし、話を聞かせてやろう…話をな」

——曰く。

『繫ぎ止めし者』によって意志を繫げられた『繫がりし者たち』は、同じ物を見、同じ思いを抱く。ひとりが見れば、百の同胞が見たも同じ。ひとりが怒れば、千の同胞が怒るのも同じ。見つからずに神の下に近づくなど、無理というもの。

(※GM ×モ : RP 待機)

エクセリア

「…つまるところ、グナース族が呼び降ろした蛮神は、言うなれば『グナース族の化身』ということか…。だが、ここに棲む『分かたれし者たち』は、何らかの事情で、意志を繫げることができないようだ。だからこそ、『繫がりし者たち』の考えを理解できない…」
ヴォルフラム

「なるほどな…。こいつらが、自分たちの神であるはずの蛮神について、意外なほどに無知なのは、そのためか…」

エクセリアは考える。

グナース族の化身…。生贊…。神に差し出す…。

それらの条件が合致するであろう内容とすれば…？

エクセリア

「相応しいのは、私か…」

王たちの継いだ残り火

そう言って、君達とエクセリア、セルマはグナースの塚に辿り着く。

(※GM ×モ : RP 待機)

グナースの雑兵

「シシシシシ…ここは我らグナースの地！それを知つての狼藉か！集え、集え！同胞たちよ！」

敵：グナース・ファイター×1d+12

君達は、グナース・ファイターを倒しながら前進した。

セルマ

「ふふふ、いい目つきをする…。よし、準備はいいな？」

(※GM ×モ : RP 待機)

そして、君達は…グナースたちに生贊にされるのであった。

(※GM ×モ : RP 待機)

グナースの塚、その最深部にて、君達はグナースの神の前に差し出される。

セルマ

「ここまでところは、思惑通り…」

グナースたちが不思議な構えをして、神に祈りを捧げ始める。

グナース族の神職

「大いなるグナースの群れは、未来切り拓く者に呼びかける…！」

聖剣を作るもの、魔を誇りし師、群れを導く神…聖剣王『アルトリア』、舞い降りたまえ！」

(※GM × モ : BGM 「星の生まれる刻」)

エクセリアが、その眼で存在を察知する。
現れた騎神は、君達をその双眼で捉えた。

アルトリア・アヴァロン
「プライマル・キャスター。召喚に応じ参上した。
さて…、なぜ、私を呼んだのです？」

(※GM × モ : RP 待機)

グナース族の神職
「輝ける聖剣王よ、我らが領土を侵したヒトを捕らえましてございます！その処断について、伺いたく…」
アルトリア・アヴァロン
「…確かに、無断で他者の領地に攻め入るのはいただけないでしょう。ですが…」
セルマ
「グナースの神、アルトリアよ！我らに、グナースの領土を脅かすつもりはない。
ただ、なぜ、竜と戦うのか、それを御神に問うために訪れたのだ」

(※GM × モ : RP 待機)

アルトリア・アヴァロン
「…最果ての島、罪の都。最後の竜は我が胸に。私以外の竜を、ヒトの治世に示すことは許されない。ここでいうヒトとは、グナースを含めた全ての知的生命に準じます。
人間もドラゴンと死闘を繰り広げていると聞きますが…その辺りはどうなのです？」

(※GM × モ : RP 待機)

その問いに、セルマが応じる。

セルマ
「いいや、違う。我らは、竜ととの争いを止めようとする者。

故に、グナースと竜との戦いも望んでいない。

グナースは、これまで静かに暮らしてきたはずだ。なぜ今になって、御神を呼びだしてまで、戦うのか！？」

(※GM メモ : RP 待機)

アルトリア・アヴァロン

「私は小耳に挟んだ程度ですが…人は、『身体は闘争を求める』等と言って、終わることのない闘争に明け暮れているではありませんか？生きるために戦う者でさえ、闘争という手を捨ててはいませんよね」

(※GM メモ : RP 待機)

セルマ

「…なれば、闘争によって語るのみ！聖剣王『アルトリア・アヴァロン』よ、我らと勝負せよ！そして、我らが勝利したならば、ウィルムフロアの竜に対する狼藉を止めよ！」

それを聞き、アルトリア・アヴァロンは静かに目を閉じる。

アルトリア・アヴァロン

「いいでしょう、その挑戦…受けて立つ！されど、私が勝利したならば、あなた達の魂を貰い受けましょう！」

そう言って、左肩の剣を飛ばして地面に突き立てる。

(※GM メモ : RP 待機)

後ろで炎が猛る音。飛び出していったのは、コズミック・クエーサー・リズン。

エクセリア

『初手をもらった…！』

そう言って、エクセリアは地獄の火炎を叩きつける。

アルトリア・アヴァロン

「へえ…人の身に神を…。しかし！」

そう言って、アルトリアは持っていた杖剣で振り払う。

エクセリアは双大剣を抜き、再び斬りかかる。

エクセリア

『あくまで、攻撃を防ぎきるか！』

剣が弾かれ、剣戟に移行する。

(※GM × E : RP 待機)

アルトリア・アヴァロン

「あなたほど、戦っていて楽しい神はいませんよ…！」

(※GM × E : RP 待機)

あ、これ埒が明かない、と分かったのか、アルトリア・アヴァロンが手を引く。

アルトリア・アヴァロン

「流石に、あなた相手ではしんどいですね。

——そこにいる、小さな英雄との戦いを所望します」

顕現を解除し、エクセリアが君達に向き直る。

エクセリア

「——だとよ。後は任せる。セルマはどうする？」

セルマ

「では、私も参る…！」

そう言って、クリスタルをぶんどって、その身にシヴァを降臨させる。

斬りかかるシヴァ、しかし防がれる。

凍てつかせるも、即座に圧でそれを融かす。

(※GM ×モ : RP 待機)

氷塊も斬り払われ、体勢が崩れた隙を突いて、シヴァの土手っ腹に杖剣を突き刺した。
返す刃で、シヴァは冷気を放つ。
やはり、効いていない…。

セルマ

『ぐっ…、これほどとは…！クリスタルが足りなかったか…』

シヴァの顯現が解除され、地に伏すセルマ。
お前は、と視線を送るアルトリア。
戦いは…まだ始まったばかりのようだ。

コンテンツ解放：アルトリア・アヴァロン討滅戦
敵：アルトリア・アヴァロン

君達は、アルトリア・アヴァロンを退けた。

(※GM ×モ : RP 待機)

おんぎゃー、と言わんばかりに逃げていくグナース族。

(※GM ×モ : RP 待機)

？？？

「やれやれ、蛮神が倒されたからって小間使いを呼び出すこともないでしょに…」

…アルトリア・アヴァロンがいた位置に、だれかがいた。…どことなく、先ほどのアルトリア・アヴァロンを彷彿とさせる外見だ。

(※GM ×モ : RP 待機)

エクセリア

「…そうか、転生の炎…。曲がりなりにも『アルトリア・アヴァロン』と『フェニックスの力』がぶつかり合ったことで、一種のエラーが発生して…こんな娘を現出させてしまったと…！」

アルトリア・キャスター

「ひどい！私は先ほどの姿と同じ格を持ちますが、蛮神としての力が封じられた、謂わばセーフモードです。話し相手ぐらいにしかなれないであしからず！

勿論——」

君達は猛烈な目眩に見舞われた。光の加護ではない、別のベクトルで。

PCへの選択肢

- ・あんまりだ…HEEEEEEYYYYYYYY
- ・あアアアんまりだアアアア！

龍神 s

「…………????????？」

日頃のストレスで発狂した君達と、君達を見て宇宙猫になっているエクセリアとアルトリア。そして…

セルマ

「フフフ…おえっ」

あまりにも滑稽すぎて笑い転げてしまっているセルマの姿があったという。

その光景を、目にしている者がひとり。

アルケイア

『やってくれるではないか、光の使徒め…。しかし、恐れと怒りの感情が存在する限り、神を呼ぶ声が鎮まることはないと知れ。神と神との争い来たれり…。貴様らには、更なる混沌が訪れるだろう…』

<hr>

君達は、ヴォルフラムたちとも合流し、ヴィゾーヴニルのもとに戻った。

ヴィゾーヴニル

「おうや、小さき者たちよ、逃げ戻ってきたのか？」

セルマ

「いいえ、ヴィゾーヴニル。こちらの光の戦士の手により、グナース族が奉る聖剣王『アルトリア・アヴァロン』は倒されたわ。ドラゴン族に対する戦いの是非を賭けて勝負し、彼らは勝利を手にした。かの神は、私達との約束は守るでしょう」

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴィゾーヴニル

「これは驚いた…誠に神を倒して舞い戻るとは！…ふうむ、それでは我が方も、約束を守らねばなるまいな。

よかろう、小さき者たちよ。『大岩窟』の最深部へ向かうがいい。靈峰に至る入口は、そこにこそある。ただし、邪竜の眷族に見つかれば、襲われることもある。お前達に、靈峰へ挑むだけの実力があるか否か…、しっかりを見極めさせてもらおうぞ」

(※GM ×モ : RP 待機)

言われた場所を通り、道中で邪竜の眷族に襲われた！

敵：フェルゲニック・ドラゴネット×4、フェルゲニック・アーマードラゴン×4

君達は、邪竜の眷族を退けた。

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴィゾーヴニル

「しかと見届けたぞ、小さき者よ…。

約束通り、眠りの地である『山門山』への道を拓こう。

だが、心するがいい。彼の地をヒトが訪れるのは、数千年ぶりのこと。そして、我らにとってこの山は、墓所でありつつ聖地でもある。

その靈峰にヒトが入り込んだと知れば、フェルニケシュの眷属たちが黙ってはおるまい。お前達は、招かれざる客であることを忘れるでないぞ…」

(※GM × E : RP 待機)

報酬

基本要素

- ・経験点：25000 点
- ・資金：15000G
- ・名誉点：なし
- ・成長回数：9 回

マジックトームストーン：

- ・詩学：100 個